

わだつみのこえ記念館紀要 2015年11月 目次

戦没学生の遺稿にみる「特攻」特別企画展示概要 3

展示期間 2014年10月20日～12月10日

特別展期間中の行事記録

◆映画とシンポジウム 2014年11月1日 4

映画『KAMIKAZE—日本の若者たちへの死の命令』(ARDドイツテレビ、2000年)

シンポジウム：「特攻」をめぐって

講師：ミヒャエル・フェルト、高辻知義、池田信雄

◆講演会 講師：福間良明 2014年11月14日 15

「特攻戦跡」の誕生と変容—知覧をめぐる記憶と忘却の力学—

◆映画と講演 2014年11月22日 32

映画『愛と誓ひ』(朝鮮映画社、1945年)

講演 裏淵弘 「朝鮮人特攻兵の悲劇」

◆不戦の集い 2014年 2014年12月1日 48

映画「学徒出陣」(日本ニュース社、1943年)

講演 渡辺信夫 「学徒出陣七十年—いよいよ深まりゆく日本の闇の中で、
なお希望を失わずに」

歌曲「きけわだつみのこえ」(藤谷多喜雄・詞、伊東乾・曲)

ソプラノ：新藤昌子、ピアノ：小ノ澤幸穂

記念館フォーラム—わだつみのこえにこたえて— 第1回記録

◆映画と講演 2015年7月18日 60

映画『KAMIKAZE—日本の若者たちへの死の命令』(ARDドイツテレビ、2000年)

講演 信太正道 「最後の特攻隊員として」

記念館運営記録抄 68

あとがき 70

戦没学生の遺稿にみる「特攻」特別企画展

展示期間 2014年10月20日～12月10日

■特別企画展序言

アジア・太平洋戦争の末期に日本の陸海軍は「特別攻撃隊」を編成して、爆弾を装備した航空機や舟艇による敵の艦艇への体当たり攻撃をしかける戦法を企てました。敗勢挽回を賭けて兵士の生命を爆弾もろとも兵器として突撃させるこの「特攻」と称された無謀な戦法には、選りすぐられた若い将兵と並び「学徒出陣」で学窓を離れ極めて短期間に訓練された学生たちや予科練出身の少年たちが多く投げられました。「志願」の形式をとりながら必死を強制されたこの若者たちを、残された遺稿・遺品によって想起・追悼したいと思います。

現代を生きる私たちはこの歴史から何を学ぶべきでしょうか。

この企画展にあたり、当館所蔵資料に加えて特別に遺稿・遺品を展示することにご協力くださいましたご遺族、諸団体の皆さんに厚く御礼申し上げます。

2014年10月 わだつみのこえ記念館

■遺稿・遺品が展示された戦没学徒

海上春雄 1945年1月9日、フィリピンのリンガエン湾にて海上挺身隊員として戦死。 享年23歳
林 市造 1945年4月12日、沖縄海上にて特別攻撃隊第二七生隊員として戦死。 享年23歳
長谷川信 1945年4月12日、沖縄海上にて特別攻撃隊武揚隊員として戦死。 享年23歳
佐々木八郎 1945年4月14日、沖縄海上にて神風特別攻撃隊第一昭和隊員として戦死。 享年22歳
大塚晟夫 1945年4月28日、沖縄海上にて特別攻撃隊第三草薙隊員として戦死。 享年23歳
市島保男 1945年4月29日、沖縄海上にて神風特別攻撃隊第五昭和隊員として戦死。 享年23歳
大塚 章 1945年4月29日、沖縄海上にて特別攻撃隊第四筑波隊員として戦死。 享年22歳
林 元一 1945年5月4日、沖縄海上にて特別攻撃隊第一魁隊員として戦死。 享年23歳
久保恵男 1945年5月7日、徳島航空隊・特別攻撃隊員として訓練中殉職。 享年25歳
上原良司 1945年5月11日、沖縄海上にて陸軍特別攻撃隊第五六振武隊員として戦死。 享年22歳
鷺尾克巳 1945年5月11日、沖縄海上にて陸軍特別攻撃隊第五五振武隊員として戦死。 享年22歳
小川 清 1945年5月11日、沖縄海上にて神風特別攻撃隊第七昭和隊員として戦死。 享年22歳
林 憲正 1945年8月9日、本州東方海上にて神風特別攻撃隊第七御楯隊第二次流星隊員として戦死。 享年25歳
水井淑夫 1945年8月10日、フィリピン海上にて回天特別攻撃隊多聞隊員として戦死。 享年23歳

■遺稿・遺品の出展ご協力者・機関名（敬称略）

石井一郎 上原清子 海上寿美子 小川幸子 加賀博子 川口絢子 熊谷眞
小島晋治 佐々木泰三 富岡知子 長谷川孝 林季正 早稲田大学大学史資料センター
慶應義塾大学福澤研究センター 海上自衛隊第一術科学校教育参考館

2014・11・1 (土) 午後2時30分～4時30分

『映画ヒシンポジウム』

於・東京大学ダイワユビキタス学術研究館 石橋信夫記念ホール
共催・東京大学大学院情報学環作曲・指揮研究室
後援・東京大学消費生活協同組合

◆映画『KAMIKAZE—日本の若者たちへの死の命令』(日本語字幕付)

クラウス・シェーラー監督、ARDドイツテレビ、2000年

「ドキュメンタリー映画『KAMIKAZE—

Todesbefehl für Japans Jugend』はドイツ公共放送連盟ARD系列ネット第一テレビ局により

二〇〇〇年八月三日午後九時四五分から四五分番組として放映された北ドイツ放送局NDR製作の作品。このシンポジウムで言及されるように、優れたドキュメンタリー映画に与えられるアドルフ・グリメ賞(二〇〇一年)を受賞している。同賞はNDR創設者名に因む。

上映にあたり、ARDドイツ東京支局の協力を得て、日本語字幕を小川マイ氏の翻訳、雪山伸一氏の監修、パラブラ株式会社制作によ

り付加し映写した。

作品は、アジア・太平洋戦争末期の日本軍敗戦必至の状況で一九四四年十月に始まる海軍・

陸軍の航空機「特攻」作戦に動員された兵士たち、また、攻撃を受けた米軍艦隊の兵士たちの存命者へのインタビュー取材、さらに関係者の証言を交えて構成される。特攻隊の編成・種別・

訓練・出撃の模様、特攻隊員の任務・心境と身辺の状況、隊員の生死に対する軍の関与と戦死者への追悼、特攻作戦から敗戦に至る戦況と戦後の評価など、日米の実写フィルムにエピソードを連ねながら「特攻」を多面的に浮き彫りに

する。

インタビューに応じ映画に収録されたのは次の方々である。(敬称略)

大貫健一郎、ジエームズ・トゥラル、ビル・シモンズ、浜園重義、久貫兼資、信太正道、桑代チノ、赤羽礼子、林富士夫、西川信義、荒木精一、大島治和、厚見富佐子。

なお、映画制作に協力したシユミット村木眞寿美氏(シェーラー監督の義母)によるドキュメント著作『もう、神風は吹かない——「特攻」の半世紀を追って』(河出書房新社・二〇〇五年刊)がある。

◆シンポジウム「特攻」をめぐつて

講師：ミヒヤエル・フェルト／高辻知義／池田信雄(司会)



写真左より、ミヒヤエル・フェルト氏、
池田信雄氏、高辻知義氏

池田 私はこの四月から妻の実家のある南ドイツのオーバーシュバーベンというところにある小さな村に住んでいるのですが、ちょうど日本へ短期帰国する直前に、このシンポジウムの司会をしろという話が飛び込んできて、なんで私なんか狐につままれたような気持ちだったのですが、東大に在籍していた最後の時期に東大生協の理事長を務めていましたので、東大生協と言えば『きけ わだつみのこえ』の第一集を出したところでもありますから、そういうゆかりがあつてお話しがあつたのかと思つたしたいです。

私の個人的な話をさせていただきますと、学生の頃に、最初に翻訳の仕事の手ほどきをしていただいたのが、後藤安彦というペンネームで主に推理小説の訳者として活躍なさった二日市安さんでした。二日市さんは重度の身障者で、小学校しか出てないのですけれども、第二次大戦中

は、家から外に出るとどういう目にあうかわからないというので、ご両親が心配してずっと大分県竹田近くの大きな農家の蚕部屋で過ごされたのだそうです。そこで本ばかり読んだ蓄積がやがてすぐれた作家を、そして英独仏語はいうまでもなくロシア語、ギリシャ語、ラテン語、中国語等十七カ国語の外国语を自在に読みこなす翻訳家を育てました。また二日市さんは障害者闘争史に名を留めるその指導者のひとりでもありました。

二日市さんの奥様が推理小説作家の仁木悦子さんで、仁木さんは一九七二年に、ちょうど「わだつみ会」の対になる「かがり火の会」という会を組織なさった。その頃私はご夫妻の家によく出入りしていました。『妹たちのかがり火』という第四集まで刊行された太平洋戦争の戦没者の妹さんたちが綴つた文章を集めた本の第一冊目が出た頃のことです。もう仁木さんも二日市さんも亡くなられて長いことになりますが、ここに持ってきたその第四集は、仁木さんが亡くなつた三年後の一九八九年に刊行されたものです。二日市安さんが「かがり火の会と仁木悦子」というあとがきを書いていて、そこに仁木さんの言葉を引いておられます。それを読ませていただきます。

「被害者意識だけが強すぎるという言い方は、当たつていなこともないわよ。でも被害者意識に徹しなくて、どうし

て加害者になることのほんとうの恐ろしさがわかるのよ」。

これは「かがり火の会」に、被害者意識に徹しているだけでいいのかという批判がたびたび寄せられていたことに対し、仁木さんが夫の二日市さんに語った言葉です。私も仁木さんから同じことをじかに聞いたことがあります。被害者意識を徹底させることによって、戦争を繰り返させないという弱者の立場を反転させようという強い覚悟の表明なのです。

東大生協の理事長だったことと、二日市さん仁木さんご夫妻との交流の思い出を心に刻んでいるという二つの体験からここに登壇しても恥ずかしくないかなと思つた次第です。

私が住んでいるドイツでは、今年が第一次世界大戦勃発後一〇〇周年にあたるので、日本より長い一〇〇年という時間枠で戦争についての回顧が行われています。来年が第二次世界大戦終了後七〇周年ですから二年続いて世界大戦の体験と歴史について振り返られているのです。ドイツと日本の違いが問題になりますが、今日この壇上に上っている三人がドイツ文学者なので、ドイツと日本の戦争に対する記憶のありようの違いについて、また今みなさんと観たドキュメンタリー映画の監督クラウス・シェーラーさんの問題意識について触れてみないと考えています。

高辻さんは私と同じ職場に二〇年おられた先輩ですし、フェルトさんも、配られた資料には記載されていませんが、一

九八二年から一九九一年まで東大本郷の独文で講師をされていました。ですから登壇している三人はともに東大のドイツ文学の仲間なのでよく気心が知っていますから、事前の打ち合わせをしてはいませんが今日は何とかいけるのではないかと思っています。

この中では高辻さんだけ戦中に生まれていて、私とフェルトさんは戦後の同年の生まれです。ですから高辻さんからは、ご自分のお兄さんたちにあたる特攻に出た世代の声を聞けるのではないかでしょうか。

今日はまずフェルトさんから、この映画の監督クラウス・シェーラーさんについてご紹介いただきます。この映画がドイツで公開されたのは二〇〇〇年、ということは二〇〇一年の九・一一事件の直前です。ニューヨークやワシントンで旅客機ごと突っ込んだ攻撃が「カミカゼ」と呼ばれたことがありますが、あの事件の前にこの映画ができていて少なくともドイツでは「カミカゼ」の脱神話化が行われていたことは、だいぶ意味のあることだったと思います。その辺も含めてこの映画について、フェルトさんにお話しいただければと思います。

フェルト 今ご覧になつた映画をつくったジャーナリストのクラウス・シェーラーさんについて、それからその映画がドイツでどのように受け入れられていたかについてお話ししよ



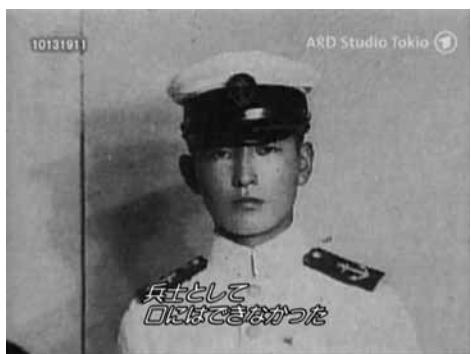
映画 KAMIKAZEのシーンより



Bill Simmonsさん



出撃する特攻隊員と握手する隊長



信太正道さん

うと思います。

シェーラーさんは五十三歳で、西ドイツで生まれました。ということはまだ東西が分かれていた時代の西ドイツですけれども、マインツ大学で、社会学と地理学、マスコミ論を専攻した。わりと新しい学問分野も入っているのですね。

彼はラジオとか新聞記者とかそちらの方面にいかないで、テレビの仕事を選びました。ベルリン自由放送局に勤めていました。私（フェルト）の出身もベルリンです。

そのあとはドイツ第一テレビ局（ARD）に行って国内の記者になりました。夕方と夜のニュースが担当でした。ニュースの方でもとても高く評価され、一九九五年から九九年まで

は週一度放送の、政治的テーマや社会問題を鋭く切り取る「パノラマ」という番組に抜擢されました。

一九九九年には仕事の方面で変化があり、ARDの東京支局に配属されました。日本だけでなく韓国も守備範囲で、五年間日本に滞在し、最初の一年に、ドキュメンタリー映画『KAMIKAZE』の取材をしました。彼の履歴を全部話すと長くなりすぎるのでかいづまみます。シェーラーさんはこのあと五年間、アメリカのワシントンに駐在しました。

シェーラーさんは若いジャーナリスト時代にすでに数々の賞を受賞しています。一九九五年のアクセルシュプリンガー賞、九六年のドイツテレビ賞、そして二〇〇一年のアドルフ・グ